市民にとって開かれた学園：筑波大学

山添悦子
前筑波大学保健管理センター薬剤師

医療施設のほとんどなかった筑波に歯科医師の夫と家族5人で引越ししてきてはや30年です。

林の中に筑波大学を中心にして筑波研究学園都市が生まれ育ってきたのを、人の一生を見るような思いで自分もその中から時には外から楽しみながら眺めてきました。

マスタープランやビジョンに託された多くの人々のあの熱き思いは、働き盛りの30代になった筑波大学に今どれほど実現されているのでしょうか。家族を犠牲に、自分の体を酷使してがんばってきた教職員がたくさんいたことを忘れてはいけないと思っています。一つ思い出すと次の記憶がよみがえり過去の思い出話は尽きることはありません。

開かれた大学

昭和48年の開学当時から、開かれた大学という言葉が錦の御旗のようにいつも掲げられていました。この何もないところに開かれたどんな大学ができるのか楽しみにしていました。

昭和48年に出された「筑波大学の創設準備について」（青表紙）に筑波大学の全体構想の特色として次の三つのことが書かれていました。

1. 教育と研究の新しいしくみ
   大学院の重視など
2. 新しい大学自治
   学長の権限の強化など
3. 開かれた大学
   社会への大学開放、理想的な学園の建設など

地域との交流

教育、研究面での大学開放はいろいろなところで実現されていることでしょう。しかし一般の市民からみた開かれた大学とはもう少し人間の顔の見える大学ではないでしょうか。

西の京都市は、大学を中心にした街づく

りに関する新プランを策定するために「大学のまち・京都推進懇談会」を設置したそうです。東のつくば市にも市民も参加できる同じような趣旨を持ったものがあればいいなと思います。民間の研究所も各工業団地に数多くあります。また地元の伝統をいろいろ守っている方など、新旧問わずこんなに人材のそろっている地域は珍しいのではないでしょうか。そのようなところから講師をお招きして公開講座など生涯教育をいまよりもっと幅広く参加しやすくおこなっていただきたいです。産学公と地域連携をして市民にとって本当の開かれた大学であって、できたら負担の少ない所から初めてほしいものです。そのような体制をつくるにはどうしたらよいでしょうか。

筑波大学のことを熟知している定年退官した大学の元教職員が筑波大学近辺にかなり住んでいらっしゃいます。そのようなかたたちがリーダーシップをとってボランテイアまたはNPO活動として大学の開放に協力するというのは実現可能と思います。

例えば、大学の周囲にサイクリングロードやウォーキングロードをつくりサイクリングの会や学内を歩く会などつくる。

大学会館、開学記念館、体育施設などもっと開放する。

筑波大学ならではの美術館をつくり休日も市民が憩えるようなところにする。

なるべく車は学内には入れない。春日地区に大駐車場を作り「のりのりバス」とか大学の構内以外では乗れないような自転車で移動してもらう。

大学で何が起きてるかわかるように大学新聞を一般の人も簡単に読めるように公民館、役所、インフォメーションセンターなどに置く。　　などなど

30年前の青表紙に施設・環境計画の基本的な考え方「大学は、その立地する都市との間に空間的、機能的な連続性を持つことが必要であり、そのキャンパスは、全体として開放的に計画し、大学人と市民との間に連帯感をかもし出せるように考慮する。」と書かれていました。

良いことも悪いこともある社会の中で、自分を守りながら自由に勉強の成果を発揮できることも大切なことではないでしょうか。

これからの少子化時代に対応して魅力ある大学になってほしいと思っています。大事なことはルールはしっかりと決める。立ち入り禁止地区ははっきりさせる、その上で真の開かれた大学を目指していただきたく思います。

ある市民に言われました

「筑波大よもっと自由に泳げ」と

（やまぞえ　えつこ）